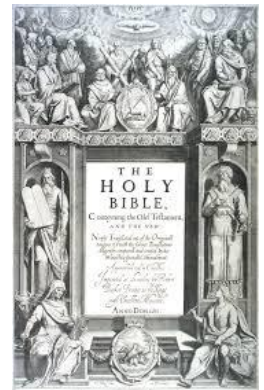


お久しぶりです。とうとう今年も最後の月になってしまいましたね。テレビでは連日、アメリカで警察官が黒人を殺したという事件について報道されています。他方、先月の4日パキスタンでキリスト教徒の夫婦（煉瓦焼きの仕事をしていて、3人の子持ちで、四番目を待っていた）が、イスラム教を冒涇したという罪で死刑の判決を受け、狂信的な暴徒たちに煉瓦を焼く竈で焼き殺されたという事件がありました。前者は世界中に知れ渡っているのに、後者は日本では知る人は5人くらいかもしれません。このような身の毛のよだつような事件は北アフリカから中近東のイスラム諸国で日常茶飯事的に起こっているのです。私達が世界で起こっていることで知っていることは、ほんの一部にすぎず、またマスコミの傾向に大きく制限されていることを改めて思い知らされます。

さて、今日から聖書のお話です。聖書は英語で Bible と呼ばれます。これは昔、と言っても紀元前千年頃、今のレバノンにあった町 Biblos（ビブロス）の名前から来ています。一説によれば、その町は本（当時は巻物）やパピルスの商売で有名だったので、Biblos は本を指す言葉となった。bibliography と言うと参考文献の意味ですし、ラテン系の言葉、例えばスペイン語で biblioteca（ビブリオテカ）と言うと図書館の意味です。そのうち、聖書は本の中の本ということで、Biblos（英語で Bible）という言葉が聖書を指すようになったというわけです。



でも本の中の本と言っても、正確にはどういう意味でしょうか。聖書という名前はユダヤ教とキリスト教の経典を指しますが、聖書は「聖霊に動かされた人々が、神からの言葉を語ったもの」（ペトロ後、1、21）、つまり神の靈感によって書かれた本だというわけです。この靈感はどんなものかについて後の神学者たちが深く考えました。カトリック教会の結論は、神は著作者に「書きたいという気持ちを起こさせ、書くべき事に向かわせ、誤りのないように導く」というふうに説明します。つまり、意識を失った著者の手が勝手に動いて聖書を書いたのではなく、ちゃんと目が覚めた状態で、自分の知識や才能を駆使して書いたという点です。ですから聖書には著者の個性が表れます。例えば、福音作家のマテオは以前は税吏だったので、『マテオの福音』にはお金や税金に関することが他の福音書より詳しく出てくる。ルカは医者だったので、『ルカの福音』の病気に関する記述はより正確です。逆にルカはユダヤ人ではないので、パレスチナの地理については曖昧なこともあります。

イスラム教の『コーラン』と比較するのは面白いです。『コーラン』はムハンマドの生前の言葉を、彼の死後弟子たちが書き残したものです。その言葉は神の言葉そのもので、ムハンマドはまるで催眠術にかけられた状態でそれらの言葉を伝えたと言われます。それゆえ『コーラン』の言葉は神の言葉そのもので、解釈を挟んではならずそのまま取らねばならないのです。他方、聖書は神の靈感を受けたとは言え、著者は各自の人間的な才能などで貢献しているので、その時代の考え方や書き方などを考慮して、聖書の文を解釈しなければその真意を読み間違えと教会は教えています。

では、聖書は神の靈感によって書かれたというけれど、そのことはどうやって証明できるのでしょうか。聖書のどの書物も「この本は私〇〇が、神の靈感を受けて書きました」と書かれている箇所はないのです。パウロの手紙などの書簡



は、普通挨拶で始まります。例えば有名な『ローマ人への手紙』は書き始めが、「・・・キリスト・イエスの僕パウロから、・・・ローマの皆さんへ」となっています。そこに誰が差出人かは書いてありますが、靈感を受けて書いたとは一言も言っていない。福音書の場合は、著者の名前さえ出てきません。ヨハネだけが、巻末に「以上のことを書き記したのは、この弟子である」と言っていますが、弟子の名前は伏せてあります。

また前回話したように、『12使徒の教訓』とか『教皇クレメンスの手紙』など、一見聖書ではないかと思える本もあるのですが、それらは靈感を受けたものとは認められず、聖書の目録から外されてしまいました。では一体、誰がこれは聖書、これは聖書ではないと決めたのでしょうか。

聖書の中に「この書は聖書である」という言葉がないのだから、それを聖書と認証したのは聖書以外の権威ということになります。具体的に聖書がどのようにできていったのかを想像してみましょう。まず聖書はすべてイエス・キリストの教えを伝えようとしたものです。イエスは2年とちょっとの間おおよかに宣教をしましたが、自分では何も書き残しませんでした。弟子たちはその後あちこちに出かけて行ってキリストの教えを伝えるわけですが、その際、初めは師の教えを書き物によってではなく、口伝えて教えていきました。最初の弟子たちは、聖書がなくても、自分たちが見聞きしたことを話すことができましたが、彼らが一人死に二人死にしていくと、目撃者の世代がなくなった後でも、教えが曲げられないように口伝の教えを文字に残したわけです。

ルカの福音書の冒頭がそのことをはっきり示しています。彼は「私達の間起きた出来事（イエスの事績）の最初からの目撃者で、み言葉の奉仕者となった人々が、私達に伝えてくれたままに書き残そうとして、多くの人が手をつけた」と言っています。

新約聖書のすべての本は、1世紀中に書かれました。聖書かなと思われる書物が出回ると、信者たちはおそらく「これはマテオが書いたと言われてますけど、ミサの中や他の集会で読んでも良よろしゅおますか」と12使徒の誰か、あるいは使徒の弟子の誰かに尋ねたでしょう。尋ねられた人たちは、「ここに書いてあることは、本当に私が見聞きした主の言葉じゃ」とか、「これはちょっとおかしいところがあるから、聖書とは言えない」とか言って、判断を下したはずです。2世紀の中頃にはおおむね聖書の正典目録ができていましたから。

つまり、聖書は初代教会を指導していた12使徒やイエスの目撃者たちによって認定されたものだという事です。簡単に言うと聖書は教会の権威によって認定された、ということです。これを否定したのがルター（1546年没）です。彼は聖書を認定するのは教会や伝承ではなく、「その書物が福音に合っているかどうかで判別する」と言いました。福音とはルターによれば、「人が救われるのは善い行いによってではなく、イエスへの信仰のみによってである」という彼の教えのことなので、結局聖書かどうかはルターが決めるということです。この基準によって「行いの伴わない信仰は死んだものである」

(2、17) という『ヤコボの手紙』は聖書から外されました。

ということで、新約聖書はイエスを目撃した人たちが、その目撃者から聞いた人たちによって書かれ、その真実性をやはりイエスを目撃した人たちによって認められたものだという事になります。その基準は「神の靈感を受けて書かれた」ということで、決して「教会にとって都合の良いことが書いてあるから」ではありません。このことについてはまた別の機会にお話ししましょう。